

オリエンテーションの始まりとその弊害

2007/12/27 横山雄三

「オリエンテーション」＝「正置」＝「整置」＝「地図の方向合わせ」＝「地図回し」＝「標定」
このようにいろいろの言葉はあるが、同じことを云っている。

1) 行く年来る年など深夜番組を見て一眠りしたかと思うと、起きたこともない時刻に仕度し、暗闇の中を、トーチランプを頼りに山登りするのは、何故でしょう。寒さの中を震えながら東方が白々と明けるのを待ち、一筋の黄金色のビームが見えると、歓声を上げるのは、何故でしょう。高山の山小屋で雲海と峰々から登る朝日を拝む登山者はもちろん、登山をしない人達でも、初日の出だけは見たいと思っているようです。

この東方遥拝あるいは太陽信仰は人類共通のものだ、と私は信じています。ところが、ある学者は、これは特定地域に限定されていて共通ではない、と云っていました。しかし、彼の発想は、アラビヤや南方インドから出たらしく、それこそ特殊な限定された地域条件から生まれているようです。「月の砂漠をはるばると旅のラクダが行きました」の世界では灼熱の太陽を避けて月を頼りに移動するのでしょうか。この世界では国旗に月がデザインされています。この地域を人類一般に適用するのは無理でしょう。

太古に原始生活をしていた我々の祖先は、洞窟や岩陰で、光も照明もない暗闇の中で、毒虫、野獣や未知の、あるいは、想像の外敵に恐れ慄き、それらから解放してくれる東方からの薄明、曙に感謝し、手を合わせたことでしょう。この感覚は、キャンプ場でない山野で、一夜でもソロで過ごしてみれば分かるでしょうし、また、過ごさなくても想像できます。この光明に感謝する心が、我々人類の遺伝子に組み込まれているのでしょう。

各宗教は、この原始信仰に上乘りしているようです。空海は、日の出が飛び込んで来たことで悟りを啓いたといい、御岳山では、日の出とともに祝詞が上げられていました。奈良の長谷寺では、拍手を打って真東を遥拝する行事が今でも行われています。キリスト教でも、光は東方よりと唱え、教会の入口を西向きに建て、拝殿が東になり、これまであった土俗の東方遥拝信仰を抵抗なくキリスト遥拝に移行させたのでしょう。この東方信仰をオリエンテーションといい、地図を東に向ける言葉に使われるようにもなったのです。もっともこの当時の地図は東を上を書いていたので。

2) この地図を現地の方向に合わせ、一致させて置く操作のことを、登山者やオリエンティア達は「正置」と呼んでいます。私は、自分から見て地図の北を常に上に置くほうが正しいと思っています。したがって、曲がるたびに地図を回して現地の方向に合わせる方法を「正置」とは呼ぶ気になりません。

オリエンテーションは、英和辞典では、地図や建物を東方に向ける、方向を合わせる等の訳があり、問題の操作と合致しています。

国土地理院出身者の書いた「最新地形図入門」には「標定」(オリエンテーション)という言葉が使われていました。しかし、この用語を明確に定義付けしていませんでした。間違っている呼称も、適切でないもの、いやですが、意味の分からないもの、いやなものです。

オリエンテーションを標定と訳す根拠を長い間探していましたが、2001年になってやっと、測量関係の用語辞典で平板測量の「平板の標定」という言葉を見ました。平板測量は、小規模の地図作成作業で、平板を基準点の上に据え付けて、アリダードという測定器で目標を見通し、その方向を図紙に

引き写し，巻尺で測った距離を縮尺した長さで，図紙に直接書込む作業です。この平板測量の始めに行うのが「平板の標定」で，平板を水平にし(整置という)，地上の測点と図上の対応点とを一致させ(致心という)，平板を正しい方向に向けて(定位という)，据付けることを云います。

登山では，高級な機器を用いる写真測量や三角測量は関係ありません。さらに，地図を置いたり，据付ける台もなければ，平板測量で使うアリゲードも巻尺もないのですが，目標物や山を地図上からの見通して探し出す作業(目標探索や山座同定)は，平板測量と全く同じ作業です。なお，現在では平板測量は行われていません。トータルステーションという測定器で目標を測定すれば，方位と距離がメモリに記憶され，そのままデータが図化されるようになったからです。

平板の正しい方向への据付けが「平板の標定」ですから，地図の方向合わせは「地図の標定」でしょう。要点はどちらも方向合わせですから，厳密に云えば「定位」でしょう。しかし，高い低いの「低位」と同じ音ですし，「定位置」のように固定的で，排他的で正当性を持つような語感があり，正置と同じ理由で使う気になれません。

オリエンテーションは，心理学では「定位」と云うようで，測量用語と同じです。オリエンテーリングは，地図と推理のスポーツですが，これを語源にしています。地上の測点と図上の対応点という極めて異質なものを無頓着に並べた「整列」と，正しくもない「正置」とを無理矢理こじつけた造語の「整置」は，測量用語では，平板や測定器を水平に据付けることだったのです。この言葉を提唱したのは，オリエンティアで，某国立大の心理学者らしいが，この誤りに気付き，恥じたのか，最初の提唱以後は，この言葉を使っていません。

3) 地図の製作にかかわっている人たちは，やらなくなった平板測量の束縛から抜け出せないようです。上記の国土地理院出身者も，正置とって薦めていました。また，国土地理院関係者らしい茨城県の「T山の会」の会報では，彼らなら測量用語の整置の正しい意味を知っているはずなのに，わざわざ，提唱者がすでに使うのを止めた「整置」を用いて会員に説明し，薦めていました。

日本の地図の原本を作っている機関の関係者が，地図を回さないと地図の読めない国民を作っていることになります。

オリエンテーリング関係の雑誌によると，地図の方向合わせは，『基本中の基本』と書いて薦めています。語源がそうだからといって，それに盲目的に忠実なようです。

登山グループには，初心者に地図を学ばせるのに，オリエンテーリングをさせるところがあります。この時，最初に「地図回し」を教えたことが，その悪習に染まって，抜け出せなくしています。

この地図回しの方法は，地図と地形の二次元的相似がやっと理解出来た人や方向オンチの人のための方法です。

方向オンチの原因は，「方位を意識しない」からです。地図を回せば，地形図上の目標点への方向が現物への方向と同じですから，見るだけなら，方位などを知る必要はありません。このため目標を方位で捉えようという意識がなくなります。地図回しを続けているかぎり，方向オンチは生涯直りません。また，地図を回すと，地図上の方位がわかり難くなります。これも方向オンチの一因になります。

地図の上にコンパスを当てて目標への方位を測る方法がコンパスの取説や包装紙にも書いてあるのですが，全く無駄な作業です。常に，北を上にしていれば，右が東，左が西，下が南ですから，地図を見るだけで進行方向程度ならわかります。地図を回したために，方位がわからなくなり，コンパスを当てて調べなければならなくなっているのです。

方位は，現場と地図とで共通して使える唯一の情報です。その方位を測定しない原因は，地図の標定

にあります。

標定後に方位測定しようとする、両手を使うので地図から手を離すことになり、折角行った標定状態が解消されます。また、先に方位測定をしようとすると、コンパスがすでに使われているために、標定できません。すなわち、方位測定と標定は両立しないのです。標定できないことが、方位測定に対する拒否反応を起させ、方位測定をあきらめ、発展性を阻害し、地形と地図上の点との見通し程度の照合という低レベルで満足しているのです。

コンパスを使って方位測定して、目標確認や現在地確認をやってみれば、標定は全く不要な作業だということがわかります。標定はメリットもないのに、より正確な情報を得るための方位測定を邪魔する悪役です。

オリエンテーリングや従来の登山書では、進む方向を知る方法については説明していますが、一番大切で、欲しい、自分の位置を求める方法を十分説明していません。この原因が、方位測定を拒否する地図回しにあるのです。

4) 「コンパスが使えない」から「地図を回す」ことになるのです。

ある時、既知の目標に向かって、地図上の目標点と現在地点を見通せるように地図を回して、固定し、続いて、未知の目標を地図上に置いた箸で狙って、箸に沿ったところにある目標を同定していた人がいました。その人の地図には、数個の目標間には線が引かれていたが、磁北線はおろか真北線もなかったから、コンパスを使っての地図の方向合わせさえも出来ません。コンパスを持っていなかったのかもしれない。こうまでして山座同定しようとしている姿勢には感心するが、方位測定による方法を知らないのは可哀そう。

「コンパスが使えない」と、

既知の目標に対して、地図を回して、見通しにより地図を地形に合わせる。

未知の目標を、見通しで確かめる方法しか使えない。

コンパスを持っていれば、上記の地図を地形に合わせることは出来ますが、

「コンパスが使えない」(方位を測ることを知らない)と、の未知の目標は、地図を回しての見通しで探すしかありません。

「コンパスは使えるよ」というかもしれないが、ほとんどの人が出来るのは、地図の方向合わせと進行方向を知る方法までです。

「地図は北に向けてひろげよう。そうしなければ方位測定もできない。地図と実際が正反対の方向になっていると、進むべき方向も確認できなければ、山座同定もしようがない」という発言がありました。明らかな間違いです。標定などしなくても、方位測定は勿論、進行方向の確認も山座同定も出来ません。すなわち、正しくコンパスを使えば、地図を回さなくても、方位を測ることで、より正確な目標や現在地が得られます。地図を回すのは全く無用の作業なのです。なお、「地図は北に向けてひろげよう」を正確に云うなら、「地図の北を北に向けてひろげよう」です。

コンパスを使って方位を測る方法が、これまで説明されてなかったのです。コンパスの取扱説明書も、正確な方位測定が出来ない説明をしていたのです。

5) 北上式

地図を回すのは、オリエンティア、旧い登山者、上記地図製作者の国土地理院関係者です。

製作者に対して使用者側の理工学系の関係者やプロは、地図を回しません。彼らが採用している正し

い方法は、地図は常に北を上にして見るのです。これを (north up)「北上式」と云います。なお、これまで述べてきた標定、「標定式」、地図回しの方法は、向いている方向を上にするから、(heading up)「向上式？」と云います。

北上式をするのに、「地図を頭の中で回せ」と云われてきました。これは極めて困難な作業を要求していることに気が付きました。将棋の内藤九段は、自分側から見ただけでは独善的になるので、若い三段の頃には、頭の中で盤面を回して相手側から見ることを行った、と云っています。でも、これは薦められません。将棋指しのような空間能力の秀才には出来ても、一般人には不可能です。

これまでの「地図を頭の中で回せ」という説明が悪かったのです。折角北上式を習得しようとした人に不可能なことを要求して、挫折させていたのです。これまでずっと「北上式」をしている私も、頭の中で地図を回した意識はありませんでした。念のため私の著書を調べてみましたが、「地図を頭の中で回せ」と云っていませんでした。

6) では、「北上式」はどうやるの？

地図は回さないで、自分の向いている方向の矢印を、地図上で回すのです。云い換えれば、地図上の北を示す印は、そのまま上に向けておいて、自分の向いている方向を矢印→でイメージし、それを地図上に貼り付け、その方向と左右に何があるかを、調べるのです。

「標定式」では実際に地図を回すから上記の理由で、「北上式」では頭の中で地図を回すことは不可能だから、結局、両方共、地図を回すことは、だめなのです。